



ウガンダ東部パドラにおけるトウオtuwo の観念 : 病いのカテゴリー88とその処方

梅屋, 潔

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 46:1*-28*

(Issue Date)

2016-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009601>

(URL)

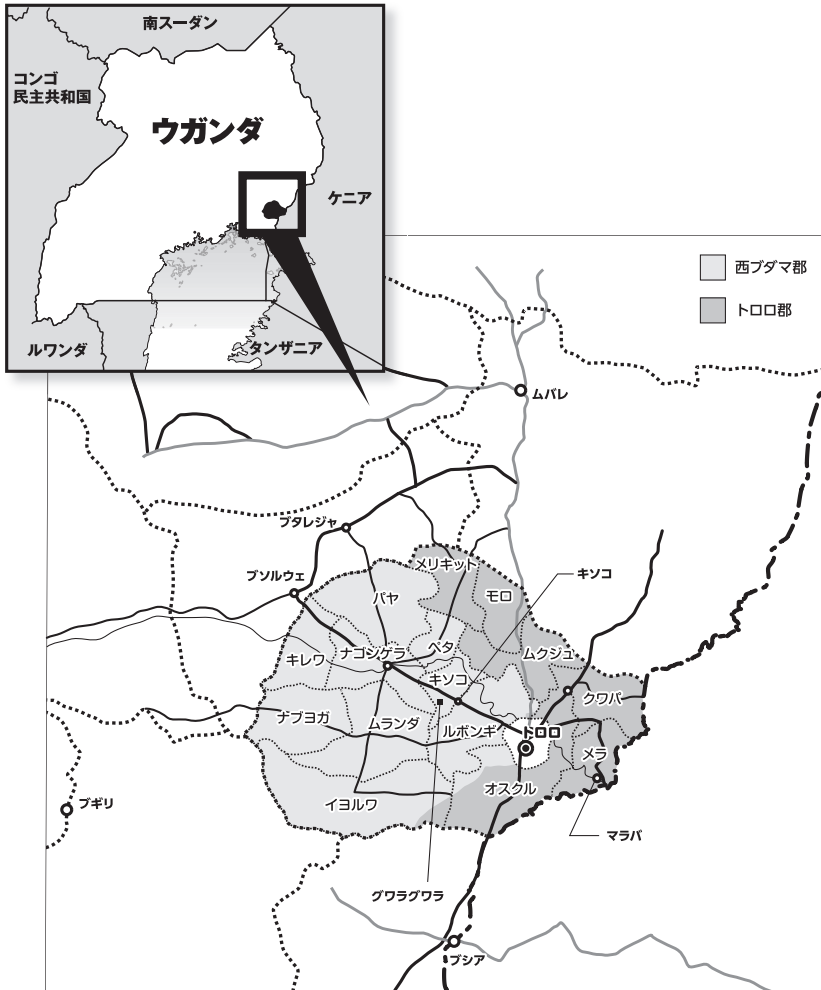
<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009601>



ウガンダ東部パドラにおけるトウォ *tuwo* の観念
病いのカテゴリ-88とその処方

梅 屋 潔

(調査協力：ワンデラ・メルキセデク、オマディア・ジョセフ、アデイン・フランシス)



地図1 ウガンダ、「パドラ」(西ブダマ郡)と調査基地グワラグワラの位置

はじめに

私は1997年から断続的にウガンダ東部トロロ県「パドラ Padhola」のグワラグワラ村（地図1）を調査基地として社会人類学的調査を行っている。ここには、アドラ Adhola と呼ばれる民族が住んでいる。「パドラ」は、アドラ Adhola という伝説上の創始者の名前に場所をあらわす接頭辞 *par* が接続されたものである。その人物の名前は、アドラ *adhola*（アドラ語で傷を意味する）に由来しているといわれており、伝承上、その手傷で機動力を失ったことが、アドラがケニア・ルオの始祖とされる弟オウィニイと袂をわかし、当地に留まった理由の一つとされる¹⁾。

本論文では、現地調査で得られた88種類のトウォ *tuwo*（仮に「病気」とする）と、その原因、またそれらにいかに対処するべきかといった知見についての資料を提示し、それらの概念のなかで、「伝統的」と呼ばれうるような既存のものと、「近代的・西欧的」と呼ばれうるような外来のものとが自覚的に区別されておらず、また区別することも困難な、「絡み合った」ものであるという実態を紹介したい。

「病」の経験は、「病因論」というひとつのジャンルがあることでも容易に了解されるように「災因」のなかでは、きわめてよく研究されてきたもののひとつである。

ウガンダにおける近代医療の普及に尽力したサー・アルバート・クック（Cook, 1945; Iliffe, 2002: 20-27）ゆかりの地でもあるパドラの場合には、この問題は、コロニアル、ポストコロニアルを通じて新しい解釈を加えられている側面を持つ。いわば、時代の変化によって経験とそれに対する解釈が多様化し、活性化しているインターフェイスであるといえる。

アドラ語で言うミレルワ *mileruwa*（広義の医療従事者）²⁾ は、「近代医療」に従事する専門的な医療従事者と、「伝統医療」ないし「代替医療」*alternative medicine* の従事者をともに包含する概念である。区別するときには西洋由来の医療従事者には「ムズング *muzungu*（一応「白人」と訳す）の」という形容がつき、伝統的な施術師には *nyapadhola*「パドラの」という形容

をつける。いわゆる「伝統的」病因論と、近代的な医療技術は、互いに排他的ではなく広義では共存するのである。

「すくなくとも日常生活の生活者レベルでは、両者は矛盾なく併存している」と1997年から2000年まで、グワラグワラにあったロモ診療所 *Romo Health Center* に常駐していたメディカル・アシスタントのワンデラ・メルキセデクはいう。たとえば Bayart (2005) ならば、こうした状況を「複数の伝統が互いに編み込まれる (the interweaving of traditions)」(Bayart, 2005: 7-58) と表現するかもしれない。両者は、植民地化に代表される歴史的経緯の下で無理やりに接合された要素を含んだものであるにせよ、現在とはともに彼らのものとなって身体化されているのである。

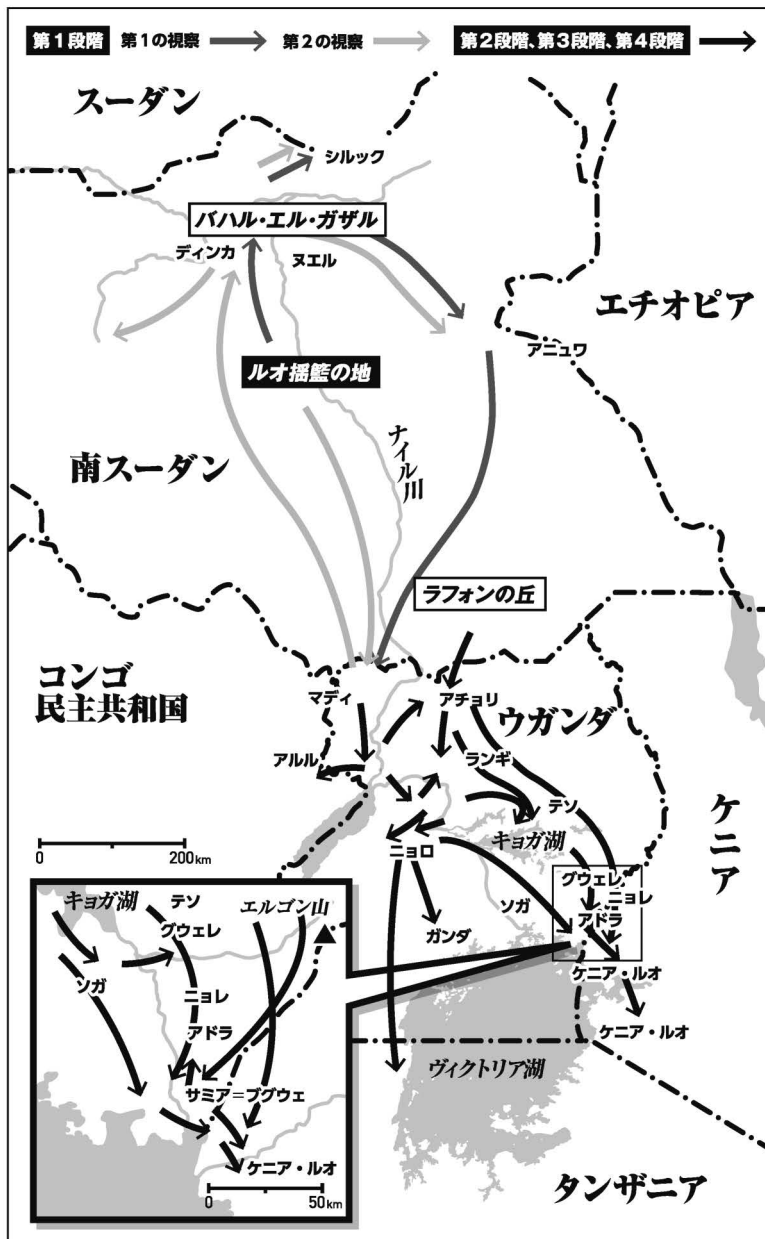
また、もう一点注目すべきは、プレコロニアルな病気の解釈と治療方法のレジリアンスである。コロニアルおよびポストコロニアルの医療がオールマイティでない以上、病気の原因や治療方法には別の解釈が入り込む余地があり、既存の解釈と方法が存続する素地がある³⁾。

1. 調査地の概況

1.1. アドラ

アドラの人口は2002年の推計で359,659人とされている。Greenberg (1963) の分類に従えば、ナイル・サハラ *Nilo-Saharan*、東スーダニック *Eastern Sudanic* のうちのチャリ＝ナイル *Chari-Nile* である。その下位区分は東・西・南ナイル系に区分され、西ナイル系は、(1) ブルン *Burun* 系統の言語、(2) シルック、アルル、ルオ、ジュル、ボルなど、(3) ディンカ、ヌアーの三つの下位区分に分類されている。(2) を特にルオと呼び、アドラはこれに含まれる (Greenberg, 1963: 85-86)。アルルやケニア・ルオともっとも親縁性が高い。

このグループに含まれる多くの民族と同じく、主食はシコクビエ (カル *kal*) を湯でこねたクウォン *kwong* で、アドラでは近隣のバントゥ系民族の影響も強く、トウモロコシを粉にしたポーショ *posho* やガンダ王国から伝えら



地図2 ルオ系民族の南下移住経路 Cohen (1968: 144) をもとに筆者作成

れたバナナ（マトケ *matoke*）も普及している。シコクビエから醸造されるビール（コンゴ *kongo*）は、社交の緩衝材としてだけでなく儀礼には欠かせないものとなっている。また儀礼では、コンゴが重視されるが、バナナから醸すムウェンゲ *mwenge* で代用されることがある。

かつては牧畜生活を主としていたが、現在は家畜の数は減少し、半農半牧畜の生活を営む。ただし、家畜、とくに牛に付与された社会的価値と儀礼的価値は依然として大きく、財産の基本単位であるほか、花嫁代償などとしては、かならず牛が必要とされる。さまざまな儀礼においても家畜の供犠がおこなわれる。

歴史学者 Ogot が世代交代の年数と記憶されている地名をもとにわりだした歴史学的な推測によれば、アドラの母集団であるルオは、13世紀ごろには現在の南スーダンにあたるバハル・エル・ガゼル近辺に暮らしていた。14世紀ごろに母集団と分かれ、紛争や水・食料問題などの理由から長期間かけて何度にも分けて小集団を形成して南や東へと移動したとみられている。その間の経路や経緯は Cohen (1968: 114) に詳しい（地図2）。

アドラはこの一連の流れのなかで、17世紀ごろまでに融合してできた集団だと考えられている（Ogot, 1967）。

1.2. 調査地概況

ウガンダの行政単位は、広域なほうから、*district*（県）と、*county*（郡）、*sub-county*（準郡）、*parish*（区）、*village*（村）ないし *zone*（地域）である。それぞれの行政組織が小さいものから LC（Local Council）1（村に対応）、LC 2（区に対応）、LC 3（準郡に対応）、LC 4（郡に対応）、LC 5（県に対応）として組織される。LC 3以上は有給の地方行政職となり、警察権も有する⁴⁾。

トロロ県西ブダマ郡（旧称パドラ郡）にある調査地グワラグワラを構成する5つの LC 1 議長によると、2012年現在のグワラグワラの総人口は3,032人である。グワラグワラ村の宿舍の標高は1,187メートル、トロロ県内では標高の

高い地域である。年間平均気温は、22.4度、最高気温平均が28.7度、最低気温平均が16.2度であり、年間降水量は、1,130mm から1,720mm でうち4月から9月までの大雨季が約60パーセントを占める。現在準郡の土地の利用状況は、82パーセントが耕作地で、9パーセントが放牧地、5パーセントが湿地帯、2パーセントが学校や役所、教会、モスク、運動場などの公共施設、2パーセントが道路、とされている⁵⁾。

耕作地でよく育てられているのは多い順にキャッサバのほかトモロコシ、サツマイモ、落花生、米、シコクビエ、ソルガム、バナナ、インゲンマメ、ダイズ、エンドウマメ、サイザルなどである。換金作物としては綿花とコーヒーを栽培している。家畜は牛を主に、山羊、羊、鶏、七面鳥、あひるなどである。

2. トウォ *tuwo* の観念と種類

2.1. リフオリとトウォ

アドラ人は、どんなトウォ *tuwo* (病) であっても、リフオリ *lifuali* (不幸) がすべての背後にあり、偶然ではありえない、という。そういった意味では、病は不幸のあらわれにすぎず、究極的な「災因」はつねにその背後にあるといえよう。その意味で「病は深い解釈を要求する」(渡辺, 1983: 336) という問題設定は妥当である。

以下に示す資料は、ワンデラと、オマディア・ジョセフの協力によって、パドラで一般的なトウォをみつめたリストである。「流産」からはじまる一見唐突なリストだが、配列の順番には現在私が知り得ない意味があるかもしれないと考えて、そのままにしてある。

2.2. トウォ *tuwo* の種類と対処方法

(1) ポド・パ・イニ・ダノ・モガモ *podho pa iyi dhano mogamo* (流産) は、このあたりでもっとも頭の痛い問題のひとつである。多いのはムスジャ・マ・スナ *musuja ma suna* つまりマラリアによる体調の悪化によるものや、ト

ウォ・マ・カニウオリ *tuwo ma kanywoli* (子宮の病) によるものがある。妊婦はムルスワ *muluswa*⁶⁾ と呼ばれる薬草を水に混ぜた薬液を飲まされた。事実、そういった処置で改善するものも多い。しかし、現在では、たいていの人はトロロの国立病院に運ばれる。

(2) ブリ・マ・ドウオンディ・ジョ *buri ma dwondi jo* も多い。これは咽のできもので、バクテリアなどに感染することによるのだが、予防の考え方からすると、体を清潔に保っておくことが大切である。垢まみれになっていると、こういうことになりやすい。施術師のところでも、切開されて管で内部の体液を抜く処置がなされる。その後、オンドウレ *ondule* という薬草を首に巻く。医療機関でも切開とドレナージをする点では、原理的にはかわらない。

(3) カルンバ *kaluma*⁷⁾。この語を訳すのは難しい。呪術によるものだろうと思う。誰かの意図による場合もあるが、外の小道を歩いていたたり、森の奥深くで「出合ってしまう」、と考えられている。不安とか、精神の不安定、などという表現もできるかもしれない。憑依霊を祓う儀礼を行う。アジュウオキ *ajwoki* やマガラ *magara*、ブラ *bura* という用語で似たような状態をあらわすこともある。

(4) ウィノ *wino*。医者は、「停留胎盤」という。トゥド *tudo* (字義通りには「縛る」こと) という邪術の一種であり妊娠している時期に友人に嫉妬の気持ちをもたれると、これが起こることがある。伝統的には、オティキ・ディエリ *otiki dieli* とカジョコロ *kajokolo* という薬草を燃やし、調理石の下に置く。出産を控えた女性の臍の部分に石でこする。妊婦はその薬草の一部を噛んで服用する。

(5) トウォ・スカリ *tuwo sukari*。文字通りには「砂糖の病」として知られている糖尿病のことである。糖分のとりすぎが原因なので、医療機関では糖分が多く含まれる食べ物を摂取しすぎないように指導されるが、伝統的には、動物の胆嚢や非常に苦味の強いものを食べることがすすめられていた。

(6) アビリノ *abirino* というのは、吹き出物やニキビの類である。医学的には、ホルモンに関していくつかの知見があるようだが、特効薬のようなものは

ない。従来は押し絞って膿んだ内容物を取り除く方法がとられていた。

(7) スリム *slim*。AIDS のこと。トゥイロの病 *tuwo twilo* と呼ぶが、この地域でももはや非常に多くの人が犠牲になっている。埋葬儀礼に出席し、死因をたずねると、もうたいていの死因はこれだといってもいいぐらいだ。この感染経路については、ある程度皆知っている。感染者との性交渉、感染したものや道具、鋭利な道具に触れること、とくにナイフや注射針などが危険なものだ。伝統的な施術師のところへ行っても、この新しい病気についての理解には、たいした違いはないので、感染者との性交渉を避けること、それから、コンドームの使用をすすめられるぐらいである。治療法は近代医療にもなく、最後には死亡する運命と決まっている。

(8) アドラ・マ・リング・ラキ・ジョ *adhola ma ringo laki jo*。字義通りには、「歯の肉のできもの」。急性潰瘍性口内炎と診断されることが多い。原因は、細菌が口中の傷にはいったためであり、口腔内を清潔に保つことが重要だ。伝統的には、モー・ディアン *mo diang*（バターあるいはギイ）を口のなかに塗りつける方法が一般的だった。

(9) カレンゲレ *kalengere*。医学的には、頸部リンパ節炎に当たる。エリスロマイシンが処方される。リンパという考え方がもともとアドラにはなかったので、食道炎も同じように認識される。オディ・オブンプ *odi omumbu*（蜘蛛の巣）が使われる。まず、蜘蛛の巣を焼く。そして、その灰をかまどの灰と混ぜて首につける。薬草アニュカ・ニュカ *anyuka-nyuka* を火であぶり、患者が噛む。症状は異なるが、カレンゲレについての認識は、ウィノに対する考え方と似ている。

(10) メロ *mero*。酒を飲み過ぎて意識を失うことがある。「アルコール性昏睡」という。女性の尿をコップ1杯飲ませる、という治療法に効き目があると広く信じられていた。現在の医療機関では、西洋医学に基づいてグルコースが処方される。

(11) ディエウォ *diewo*。下痢のこと。消化器系の病気は、ありふれてはいるが、それだけに非常にたくさん原因が疑われやすい。たとえば、呪術。毒。

マラリアでもこの症状はありうるし、AIDS でもみられる。不潔だったから、ばい菌が口から体内に入って悪さをしているのかもしれない。伝統的には、イエケ・イエケ *yeke-yeke* という薬草、シワ・マ・タリ *siwa ma tari* という薬草と、十分な水分とともにアチュワ・マ・ミティ *achwa ma miti* (樹木の一種) を与える。清潔がなによりだ、という考え方も伝統的にあるので、排泄物の処理には気をつける。

(12) キディンピア *kidimbia*。貧血のことだ。クワシオルコル *kwashiorkor* (ガーナ、アカン語に由来する語だが、「消耗症」として医学用語としても定着している) ともいう。アドラ語で、「血がない」*ongoye remo* という。ひどいときには、顔がむくんでふくれあがったようになるという。医療機関では、鉄分を補給する錠剤を与え、安静にするようにすすめるしかない。伝統的には、オシガ *osiga* という野菜を調理して、摂取すると予防のためにいいとされている。食欲増進の効果があるという蔓草ニヤムケシ *nyamukesi* から調合した薬草をとることもすすめられる。

(13) ミニ・イエ・オウォキ *miniye owoki*。これは、痔のこと。大便の圧力が、引き起こすいわゆる切れ痔、便秘との関連で起こるものがある。伝統的な治療法としては、背中を押したりする療法が知られている。シラニエンデ *siranyende* とドゥキノ *dukino* という薬草をバナナの葉の上に置いてそこにしゃがむ。その後、その薬草を飲み水と混ぜ、一緒に沸かして飲む。AIDS でこの症状にそっくりな状態になる場合もある。

(14) オグワンギ・コ・カイン *ogwangi ko kayin*。動物に噛まれたらきれいに患部を洗浄することだ。鳥の糞を塗りつけるのが、伝統的な治療法である。

(15) トウォ・マ・チョコ *tuwo ma choko*。関節炎、「骨の病い」と呼ばれる。マイギ *maigi*、つまりリューマチと対処法は同じである。関節が腫んだ場合、つまり細菌性関節炎にかかった場合は、膿を除去する点は、同じだが、プニイ *punyi* という薬草の根を地酒マルワ *malwa* とリウォンベレ *liwombele* という蔓草と一緒にすりつぶして乾燥させたものを1日2回、1週間のあいだ、経口摂取する。リウォンベレは、儀礼でよく壺に巻き付けられる蔓草の一種であ

る。

(16) キディニ *kidini*。回虫症のことをこういう。不潔にしていると、これにかかる。便所が不足していることが、この病気の蔓延を許している要因である。診療所に行けば、ベルモックス（メベンダゾール）の錠剤かシロップ、レバミゾールシロップ、ディカリス、あるいはケトラックス（薬剤名）、その他の名前で出回っている薬を処方されることになる。伝統的には、アチワ・マ・ケッチ *achiwa ma kech* という薬草をすりつぶし、水と混ぜ合わせ、コップで患者に飲ませる。また、ムスルワ・マ・タリ *muluswa ma tari* も同じように飲ませると効き目が期待できる。

(17) アシマ *asima* という。ぜんそくのこと。肺へつながる気管支の狭窄が原因のひとつだが、伝統的にはプニイ *punyi* という蔓草植物をすりつぶし、それを嚙むように指示される。診療所にいくとサブタモールが処方される。

(18) イーマ *yiima* という病気。これは脾臓が肥大する病気だが、マラリアによってもおこるといわれているが、原因はまだよくわかっていない。オカタラ *okatala*⁸⁾ という薬草の根っこ蔓草植物カナキ・ナキ *knaki-nakii*、そしてルク *luku* をすりつぶし、水と一緒に混ぜて経口摂取する。

(19) カチョ *kacho*。虫にさされてしまったら、モー・タラ *mo tala*（灯油）をそこに塗ったり、ミキシンデ *mikisinde* という草を患部に強く押しつけるとよい。

(20) スウォリ *thwoli*（蛇に咬まれた傷）。テレ・マチョリ *tele macholi* という黒い石を用いて体内の毒を吸い取る。対応が早ければ助かることがある。

(21) チュウエリ・パ・ウミジョ *chweri pa umijo*。鼻血。患者をみたら、この地域では基本的にはマラリアで熱にうなされているか、腸チフスが疑われ、診療所でもそういった対応をする。しかし、伝統的には冷たい水を額に注ぐ対処がとられる。

(22) ブリ *buri*。腫れものは、不潔なためにおこることもあるし、細菌が体内に入ったことによることもあるが、邪術による、ということもある。体内の腫瘍についてもほぼ同じ考え方がとられる。

(23) ウォロ・マ・コリ・ジョ *wolo ma kori jo* (咽の病) 咳がとまらない、いわゆる気管支炎である場合が多い。伝統的には、薬草を混ぜて準備する。薬草をムルスワと水と混ぜて、また、蔓草植物プニイ *punyi* を水と混ぜて服用する。12時間おきに服用する。だいたい5回から7回これを繰り返すとなおることが多い。

(24) トウォ・マ・ミヨ・イイ・ドキ・ポド *tuwo ma miyo iy dhoki podho* (牛が流産する病)。これは、ブルセラ病が疑われる。抗生物質を投与する。

(25) トウォ・マ・クウォト・ンガンギジョ *tuwo ma kwoto nganggi jo*。両足の付け根の病気。両足の付け根に痛みをとまなう、横根 (よこね) (医学用語)。薬草を粉にして水とバターとで混ぜあわせて処方する。

(26) ワンギ・ギ・マッチ *wangi gi machi* (火による火傷) あるいはワンギ・ギ・ピー *wangi gi pi* (お湯による火傷) は、冷たい水を注いで、ウサギの毛皮を傷を覆うようにかぶせておく。医療機関では抗生物質が処方される。

(27) トウォ・アドウンド *tuwo adundo* (心臓の病) 心不全。これは、血液が不足している、という考え方から (12) のキディンビアと種類が似ている。心臓自体に細菌が入り込んだ、とか先天性の問題である可能性も排除できない。山羊の心臓を食べるとなおると考えられている。また、バナナのうちの一種、ゴンジョ・マ・ンティエ・マ・ウォウエ *gonjo ma ntiye ma wowe* を食べるとなおるともいわれる。

(28) トウォ・イイ・ジョ *tuwo iyi jo* (腎臓の病気)。今日では腎炎と呼ばれる。(27) の心臓の病と同じように、食事をしっかりととり、酒をのまないようにしたほうがいいといわれる。

(29) ムボワ *mbowa*。蜂窩織炎という。オボソ *oposo* という薬草、赤腹の黒い蟻が薬として処方された。皮膚炎、なかでも呪術による手足の腫れが疑われるものについては、便所の穴や調理石に患部を乗せたりする方法があったが、現在ではこれをする者はほとんどいない。

(30) ムスジャ・マ・スナ・カ・オドンジョ・イニヤンギシ *musuja ma suna ka odonjo inyangith* (脳に入ってしまったマラリア)。マラリアでも、脳をや

られると、症状は（87）狂気、ネコ *neko* と同じなので、病院に送られる（（87）参照）。

（31）トウォ・マ・ニヤサイエ *tuwo ma nyasaye*（子宮の病気）。ムブラ・キフオ *mbula kifwo* つまり淋病がもっとも疑われる。この処方は梅毒に関してと同じである。

（32）トウォ・マ・タコ *tuwo ma tako*（胆の病）。胆嚢炎（Cholesystis）は、「油のとりすぎ」*bori maditi* とされるので、脂質の摂取を減らす。

（33）ディエウォ・マ・ピヨ・ピヨ *diewo ma piyo piyo*（文字通り訳すと「急な下痢」）。コレラ。不潔のことをコッチ *kochi* というが、コッチが原因であるから、清潔にすることである程度予防できる。ただ、下痢により水分が失われるので十分な水分を補給してやる必要がある。

（34）トウォ・マ・チュニイ *tuwo ma chunyi*。肝炎。原因は酒の飲み過ぎがおおい。マゾ・ングリ・マゾシ *madho nguli mathothi*、つまり、ングリという蒸留酒を飲み過ぎるとこうなる。伝統的にはチュンビ・マノック *chumbi manok*（塩分を与えない）。腹水が溜まるからであろう。チェモ・マケロ・メニ *chiemo makelo meni*（炭水化物をたくさんとる）。キダダ⁹⁾ という毒を盛られたときのように腹がふくれあがる。

（35）トウォ・マ・ギリエ・ジョ・マ・ドンゴ *tuwo ma girye jo ma dongo*（大腸の病気）。細菌が入り込んだことによる。また、ひどいディエウォ *diewo*（下痢）に悩まされる。米やラブウォ・ニヤキズング *Rabwo Nyakizungu*（じゃがいも）を食べると下痢はおさまるとされる。

（36）ムスジャ *musuja*。一般的な悪寒。日本語の「風邪」に近い特徴を持つ語。インフルエンザのこともありうるし、赤痢のこともある。医療機関ではそれを特定してから治療するのがふつうだが、十分な水分摂取をすすめて、炉など火のたかれている場所の近くに座らせたりするのが一般的だった。また、ベッドで休むことが推奨されることも多かった。

（37）トウォ・マ・ワンギ・ジョ・ギ・スビ *tuwo ma wangi jo gi thubi*（目の炎症、結膜炎）。外傷、細菌がはいったと考えられる。とくに不衛生だとかう

したことが起こりやすい。ピギ・ボケ・ヤーシ *pigi boke yath* (樹木の葉からつくられた樹液を調合した薬草) が処方され、よく目を洗う。

(38) ピエリ・オムニエ *pielo omunye*。便秘のこと。これは便所に行く習慣がうまくついていないことが原因で、変にがまんすることが習慣化するとおこりやすい。また、消化に悪いものを食べ過ぎると、こうなることもある。水分をたくさん摂取することと、アボカドやパウパウ *paw-paw* などを食べるといい、ともいう。

(39) グウェチヨ・パ・ニシンド *gwecho pa nyithindho* (子供が病気の時、あるいは何かに満足していないときに起こす衝動的な動き)。子どもが痙攣をおこすことがある。これは、ジュウォギ¹⁰⁾ のせいにもされることもあるが、マラリアだったり、血圧の問題だったり、ということがある。ジュウォギを祓う儀礼を行うほかは、お湯に浸した布で体を拭いてやるとかの方法がとられていた。

(40) パンガやナイフなどでの切り傷は、まず止血することが大切だ。ひもなどを用いて患部を縛ることが有効だ。「失う血を少なくする」 *tweyo remo okiri ochweri* という言い方をよくする。

(41) トウォ・オレヨ *tuwo oleyo* (膀胱の病)。膀胱炎。これは、(32) の子宮の病気とおなじくムブラ・キフオ (淋病) によるものがあるので (49) も参考にしてもらいたい。単に細菌が感染しただけのこともある。

(42) ゲモ・ギ・ブリ・イ・ラキ *gemo gi buri i laki* (「菌が膿んで穴が空く」)。医学的には菌性膿瘍。伝統的には患部で灰を嚙んで、うがいをすることが伝統治療としては行われていた。

(43) ゲモ *gemo*。う蝕。菌のカリエスのこと。虫歯もこれに含むことがある。たいがい不衛生にしているのが原因である。伝統的には、毎食後と毎朝、チュキ・マッチ *chuki machi*、つまり灰や木炭で歯を磨く。マウォレウオレ *mawolewole* (腐ったバナナの茎) で患部をマッサージする。リンブグ *limbugu* という薬草の根で熱湯とともに患部を刺激する。伝統的には、主な原因は歯の中にいる虫だと信じられていた。現在の医学では、食事するたび

に、細かな食べ物の小片が口の中に残ると信じられている。こうした食べ物のかすは細菌によって酸をつくりだし、歯を腐食させ、穴を作り出すと考えられている。

(44) クウェロ・チエモ *kwero chiemo*（「食欲が起こらない」）。原因は、マラリアや風邪のように多岐にわたるが、麻疹のこともある。あるいは消化器官に疾患があるとうこういった症状を引き起こすこともあるだろう。いずれにせよ、医療機関では、原因を特定してから治療をはじめるが、伝統的にはニヤムケシ *nyamukesi* という薬草を水に混ぜ、沸騰させてから患者に与える方法がとられていた。たいていはすぐにその後、患者の食欲は増進していたものだ。

(45) ディエウォ・マ・レモ *diewo ma remo*（赤痢）。即効性のある万能の処方箋はない。水分補給が大切である。抗生物質を投与しておけば、ある程度すれば改善することが見込まれる。

(46) リソカ・ダコ・ルコドウェ *lithoka dhako rukodwe*（月経時の違和感）。正常でもときにこの状態に悩まされる女性が多い。生理痛が重い、という人は結構いる。ただ、淋病のように STD（STD: Sexual Transmitted Diseases）によるものもあるので見分けが難しい。伝統的には、淋病と同じようにする。

(48) のムブラ・キフオを参照のこと。

(47) オドキ・イ・イシ・ジョ *odoki i ithi jo*（耳垢）。油を乾いた場所に与えて、適度な潤いを与えておく。

(48) ムブラ・キフオ。これは今日では淋病として知られている。代表的な STD のひとつである。伝統的には、ムルスワの葉を粉にし、その根を混ぜて薬をつくる。3日間毎日カップ1杯飲む。ラグウェ *ragwe*（蜥蜴の白いもの）とゲコ *gecko*（頭の赤い蜥蜴）と薬草オシト *osito*¹¹⁾ の根をすりつぶして、経口摂取する方法もある。

(49) ポド・フミ *podho fumi*（てんかん）。これらの意識障害の類は、かつてはジューウォギのしわざと考えられていた。しかし、精神的外傷、トラウマによってこの症状を示す人もいるし、日常のいろいろな雑事の厳しさによってこうした症状を示す人もいる。あまり原因がわかっていないことも多いのではな

いか。伝統的には、スンド・ヤゴ *thundho yago* という薬草をすりつぶしてその薬草の液にクライアントの体を長期間浸しておく。

(50) ミディノ *midhino*。皮膚のできもの、湿疹や皮膚炎などを総称してそう呼ぶ。原因はよくわかっていないが、山羊の肉を食べるとこの症状を示す人がいるようだ。伝統的には、カパンガ *kapanga*¹²⁾ の葉で患部をこするなどし、あるいは、アディ *adhi* (テントウムシ) と、羊の糞を同様に皮膚にすり込む、などのことが行われた。これは1日4回行う。西洋の治療としては、ベタメサゾン・クリームが一般的である。

(51) 白癬も (50) ミディノと同じようにとらえられ、同様の対処がとられた。

(52) ラキ・ニヤシ・マコ・ティレ *laki nyath mako tire*。生後5ヶ月ぐらいから乳歯が生えてくるが、これは無意味なものだと考えられている。ポトング *potong*、偽歯という。下痢をしたり、嘔吐したりする「病因」のひとつと考えられ、施術師の手で引き抜かれることが多かった。抜いたあとの傷には、オベリ *oberi* (ジャカラング) の木の根をこすりつけた。

(53) トゥリ・パ・チョコ・ダノ *turi pa choko dhano* (骨折)。伝統的には、アロエの一種が患部にあてられ、患部を固定する。

(54) ムスジャ・マ・スナ・ケロ *musuja ma suna kelo*。マラリア。かつてはジュウォギのしわざと考えられた。患者を分厚いシートやブランケットで木の上などに吊しあげて、ムルスワ、ユーカリなど低木の葉を集めて燃やし、患者をその煙で燻した。あまり状態がひどいときには病院に運ぶのがよい。(1) と (36) も参照。また、新鮮なムルスワが絞られ、入浴に使われる。

(55) チロ・マ・カニョウォリ・パ・ダコ *chilo ma kanywoli pa dhako*。医療機関では膾トリコモナスと呼ばれる。伝統的には、患部を清潔にたもち、性交渉を避けるのがよいとされる。

(56) コヨ・マシンド *koyo mathindho*。麻疹のことをこう呼ぶ。これも意識障害が伴うこともあるからジュウォギのせいとされることが多かった。一定期間症状が続くので、何か悪い予兆であるという解釈も、過去には頻繁にあったと考えられる。治療法としては、蜂蜜モー・キチ *mo kichi* をクライアントに

与える他、蔓草植物であるニャムケシを食べさせ、食欲を回復させることが大切とされた。また、食欲が回復してきたら、肉など高タンパクの食べ物を与える。この病気が伝染性のあるものであることはある時期からは知られていたもので、子供の水浴びを患者にさせることは、禁忌だった。

(57) ピシ・マラーチ *pithi ma rachi*。栄養不良。栄養失調。いわゆる高タンパク食が推奨される。肉の他には、たとえば胡麻、大豆、バター、卵などがすすめられる。

(58) トウォ・マ・テロ・ングティ・ジョ *tuwo ma telo nguti jo* 髄膜炎にあたる。伝統的には、塀に用いる樹木の葉のうち緑のものをもってそれでマッサージすることが多いが、重篤な場合病院に連れて行かれる例も多い。ジュウォギのせいにもされやすい。

(59) アドラ *adhola*。潰瘍のことである。ピロワの木の樹液が傷に塗布され、灰をかぶせて乾燥させ、そして現在では抗生物質を投与する。

(60) トウォ・スンド *tuwo thundho*（「乳首の病」）。伝統的にはカギノ *kagino* という植物の葉を使う。すりつぶして胸に塗り、マッサージする。母乳を搾りだす。これは毎日行う。

(61) ヤーシ・オイエヨ *yath oyeyo*。「猫いらず」つまり鼠を殺す毒をあやまって食べてしまうことがある。そういった場合には、ミルクをたくさん飲ませ、生卵をたくさん飲ませる。

(62) ニヤッチ *nyachi*。梅毒のこと。典型的な STD だ。伝統的には、性交渉を避けることはもちろん、ムルスワの葉をすりつぶし、水に混ぜる。それを1日2カップ2週間、経口摂取する。伝統医療だけでなるとは考えられていない。

(63) トウォ・レロ *tuwo lelo*。偏頭痛。原因はよくわからない。頭の血管に血が溜まっているのだと考える医療従事者が多い。伝統的には、（悪い血が溜まっているとの考え方から）頭に印をつけて、ある程度の傷をつけ、15分間ほど瀉血する方法が知られていた。オシトという薬草を処方する。これは効き目がある。診療所に行けば、プルプラノロールや、エルゴタミンが処方されるだ

ろう。

(64) トウォ・コリジョ *tuwo korijo*。胸の痛み。農作業などで過度の運動をした場合におこりうるが、内臓疾患と関わっていることもあるので注意が必要だ。かつては胸に印をつけ、傷を付けて、わずかに出血したら、アタワ *atawa* という薬草を塗りこんだ。

(65) ポリオのようなものにも、かつてはジュウォギが疑われた。邪術の可能性もある。排泄物からさまざまな経路で経口感染する。不衛生によってウイルスが蔓延すると考えられた。子供の頃にポリオに免疫がないので、とりわけ注意が必要である。伝統的には、邪術の容疑者を屋敷などに監禁したりした。また、二口の壺の中に子どもを入れ、森の奥深くに子どもを置き去りにすること（結果おそらくは死亡する）がよく行われたこととして伝えられている。発症し、終生麻痺がおこると、医療機関でも完治の方法はない。車いすや、松葉杖が手放せない生活を余儀なくされる。

(66) アイラ *ayila*。掻痒症。悪い水が原因で、オンコセルカのように虫が関わっている場合もある。AIDS や何かのアレルギーでも類似の症状は出るし、ムカデに刺されたり、薬の副作用でも起こりうる。伝統的には、カパンガの葉を芋と混ぜ、アディと混ぜてつぶし、塗布する。

(67) マイギ *maigi*。リユーマチ。伝統的な対処方法としては、アバク *abak* という木の根をマルワに混ぜて飲む、アユチャ *ayucha* という薬草をすりつぶして、経口摂取する。また、薬草としてはアユウェリ *ayweli* とシラニエンデ *siranyende* という薬草も知られている。

(68) トウォ・ピエリ *tuwo pieri*（「背中」の痛み）。過重な肉体労働。腎臓の病気などが疑われる。伝統的には、オスウェリ *osweli* の根をオフルル *ofululu*（白身の魚）と一緒に混ぜて、患部に湿布することが多い。

(69) オングラ *ongula*。白内障。目の水晶体に傷がつくことによる。栄養失調や麻疹によっても起こるといわれているが、経緯がよくわからない場合もある。伝統的には、目に水を吹きかけ、洗浄するためにマロンゴ *malongo* という木を用いる。1日3回それを実施する。イティ・オイェヨ *ithi oyeyo*（鼠の

耳）をマンブ *maumbu*（バナナの葉のなかでも開かずにまっすぐ伸びるもの）の上において、同様に患部に吹きかける。

(70) ウォロ・マ・レモ *wolo ma remo*。結核のことである。原因は感染者からの空気感染だが、沸騰していないミルクを飲んだから、という理由も聞くことがある。伝統的には、アチャキ *achaki* という苦味のある薬草を焼いて灰にする。アス・マ・マトケ *asu ma matoke*（バナナの茎）、ニヤメジ *nyamegi*（バナナ的一种だが、ムウエンゲ（酒）にするのに適したもの。ムビイエ *mbye* とも）を焼いて灰にし、摂取する。約二ヶ月と治療期間は長い。

(71) カソング *kasonga*。肺炎のこと。咳によって伝わる。伝統的には、プニイという蔓草植物をすりつぶし、水と混ぜて1日5回経口摂取させる。

(72) キリミ *kilimi*。急性咽頭蓋炎。伝統的には、オンドゥサ *ondusa*（薬草）をすりつぶし、処方される。5日間に3回、摂取する。医療機関でなく施術師でも刃物を用いて切開することがあるが、現在ではあまり推奨されない。

(73) ルリ *luri*。種なし。生まれつきのものと呪術によってそうなってしまったものがある。伝統的には、特別な薬草を噛んで飲むと患者に高い性的衝動がわき起こるといわれているが、その薬草の種類や作り方は、なかなか教えてもらえない。

(74) ロロ *loro*。水頭症。これも生まれつき、あるいは何らかの呪術によるものと考えられている。伝統的には、アモ *amo* の根を掘りだし、水に溶かして飲んだり、卵を殻ごとゆで、卵に生のままのマテケラ *matekela*¹³⁾ と胡麻麻の種、沸騰した水をすべて混ぜてつくられる。毎日カップ1杯与える方法が一般的だった。

(75) アポム *apom*。象皮病。これは農作業をしているときに畑で呪術をかけられた場合がありうる。あるいは、カタツムリを踏みつぶすとうなるといわれている。伝統的には、特別な薬¹⁴⁾を患部に吹きつけ、カミソリで傷をつけてすり込む。

(76) マルウィニョ *malwinyo*。サナダムシ。調理がじゅうぶんされていない肉、生煮えの肉などを食べたのではないかと疑われる。伝統的には、オセヨ

oseyo という植物の根をすりつぶして、水と一緒に飲む。

(77) ニヤングス *nyanguth*。ハンセン病。生まれつきだとか、呪術によるものであるとか、意見が分かれる。伝統的には、アフリカニシキヘビの肉、特に脂肪の部分モ・ニエロ *mo nyelo* が効果があるといわれている。逆に羊の肉や、セムトゥンド *semutundu*¹⁵⁾、ティラピアなど水中にすむ動物を食べてはいけない。特定の薬草を体に塗ることもされていた。

(78) カセング *kasengo*。疥癬。不衛生が原因といわれる。伝統的には、アモ *amo* という木を細かく割って¹⁶⁾、煮詰め、体に塗る。サブニ *sabuni* (石鹸)、やオモ *omo* (洗濯用洗剤) をきちんと用いて、体や着衣を洗うこと。

(79) アルニャ *alunya*。頭部白癬。伝統的には、アトンギ *atongi* (ヌスビトハギ) という薬草を煮て、すりつぶし、そして患部に塗る。チャングウェ *changwe* (ヘチマ) の葉、イエケイエケ *yeke-yeke* の根も効き目があるとされる。

(80) ワガ *waga*。足のかゆみ。大便で汚れた場所を裸足で歩いたりした場合にはこうしたことがおこる。伝統的には、患肢に尿をかけるとなおるとされた。

(81) キダダ *kidada*。症状としては腹水がたまること。飲食時に呪術、とりわけ毒を混ぜられた場合に起こる。伝統的には、コンゴやマルワあるいは紅茶に薬草を混ぜ、飲むという処方があったが、一説には、これにかかるともう助からないともいわれている。事実ハーバリスト(薬草師)のところに連れて行かれれば100パーセント死亡するだろう。通常、患者は体内の液体を吸収するような激しい嘔気をもたらし薬草が与えられるという。伝統的ハーバリスト(薬草師)はその薬オボソ *oposo* という木を粉にして、お茶やコンゴと混ぜて飲むように、というような治療をしているようだ。

助かったケースもあるが、その場合には、キダダではなく、酒の飲み過ぎによる(トウォ・マ・チュニイ (34) 参照) だったのだろうと考えられる。

(82) ワリゴナ *waligona*。鬱。これはカルンバと並んで難しい病気だ。犠牲獣として雄鳥、雌鳥、山羊、が必要である。施術師がこれらを供犠する。

(83) ブボ *bubo*。卵管卵巣嚢腫。これは、淋病による。伝統的には、マス *masu* とチュム *chumu* などの薬草が与えられ、水とバターと一緒に飲む、という治療を行っていた。

(84) ロンゴ *longo*。これは、陰嚢水腫のことである。わざわざ富の象徴として、薬でこれを自らつくろうとする人もかつてはいた。病院に行き、外科手術で中に溜まった水を抜く人もいる。水を抜いてもまた溜まることが多く、根治療法はないのではないか。

(85) トウォ・イシ・ジョ *tuwo ithi jo*。中耳炎のことである。伝統的には、オドゥオンゴ *odwongo* という薬草を耳の穴のなかに注ぐ。

(86) ウイロ・ングティ *wiro nguti*。斜頸。伝統的には、オンドウレ *ondule* という玉ねぎのような植物を首に巻きつける。

(87) ネコ *neko*。狂気。呪術によるもの、ジュウォギのしわざ、あるいはマラリアの重篤な症状と認識される。ジュウォギのせいならば、その由来するブッシュへ帰ってもらふ儀礼を行わなければならぬ。呪術の場合、その効き目に対抗する呪術を薬をもちいて行うことで、治療が期待できる。

(88) ラッチ・レモ *lachi remo*。血尿。原因は膀胱の問題と考えられる。伝統的には、ギダディレ *gidadile* という薬草を混ぜた尿を飲むように与えられる。経口摂取する。ライウェ・モ・ボケレ *raywe mo bokere* とオシトの根をすりつぶして熱湯で煮詰め、経口摂取される。

3. 資料の分析と考察

このリストでは、随所に衛生学的な、サニテーションにかかわる記述が目につく。「細菌が口中の傷にはいったためであり、口腔内を清潔に保つことが重要だ」((8))、「不潔だったから、ばい菌が口から体内に入って悪さをしているのかもしれない」((11))、「患部を洗浄する」((14))、「不潔にしていると、これにかかる」「便所が不足していることが、この病気の蔓延を許している」((16))、「不潔なためにおこることもあるし、細菌が体内に入ったことによることもある」((22))。「不潔のことをコッチ *kochi* というが、コッチが原因で

あるから、清潔にすることである程度予防できる」((33))。「とくに不衛生だ
 とうしたことが起こりやすい」((37))。「単に細菌が感染しただけのことも
 ある」((41))、「たいがい不衛生にしているのが原因である」((43))、など
 ある。「清潔がなによりだ、という考え方も伝統的にあるので、排泄物の処理
 には気をつける。これは医学的にも理にかなったものだ」((11)) というが、
 これを真に受けてこれらがすべてプレコロニアルから常識だった、と考えるの
 も、完全に外部からの導入であると考えたものともに早計であろう。

トロロに本拠を置く現地 NGO が上映するドラマで、食後の手洗いを普及す
 るエクステンション・ワーカーが登場するものがある。テーマは、「開発とは
 何か」であった。それが象徴的に物語るのは、手洗いなどの普及がいかに困難
 だったかということである。衛生観念の普及活動が困難を極めたことは知られ
 ているが、現在では、教え込まれたこととは思えないほど身につけている。彼
 らは、「絶対」といっていいほど、ひとたび地面に落ちた食物を口にしない。
 その床がいかに清潔に清掃されていようと、である。実際にはテーブルの上
 と清掃済みのリノリウムの床がどちらが清潔なのかは、顕微鏡を使用でもしな
 い限り、科学的な検証はできないはずである。例外を一度だけ見たことがある。
 私の調査助手の一人、マイケルが、炭のコンロに鉄網を敷き、焼いていた
 鶏肉を一切れ、コンクリートの床に落とした。彼は「黴菌もまだ気付いていな
 いだろう」と言って拾って食べた。いわゆる「3秒ルール」である。この出来
 事が例外的にみえるほど、彼らには徹底した衛生観念が刷り込まれているとい
 える。しかしながら、それらが完全に外来のものなのかどうか、今となっては
 それは全くわからないのである。随所に認められるのは、すでに浸透し、接合
 され、過去のものとして切り分けて区別することもすでに難しくなった、じゅうぶ
 んに身体化された外来の衛生観念の姿なのである。

むすび

もちろん、この88種類のカテゴリーが、パドラのトウォ *tuwo* を完全に網羅
 的にカバーしているなどというつもりはない。しかし、このリストが、パドラ

人の認識するトウォ *tuwo* のかなりの部分を反映していることは事実であろう。

リストが完成してからも何度もオマディアたちと、改訂作業を試みた。その後も独自に改訂を行い、ワンデラとオマディアは、のちになってより近代的な処方箋を満載した、おおむね19項目からなる医療者の手引きのようなものを作成した。その資料では医療指導をする立場でもあるワンデラの積極的関与があったようで、薬剤名や医療用語への言及が膨大になっていた。しかし、その資料においても、ジュウォギが病因から消えることはなかったし、かんぜんにヤーシ・ニャパドラ *yath nyapadhola*（アドラ流の薬）が処方箋情報から削除されることはなかった。あらゆる手立てを尽くしても治らない病がこの世にある以上、ジュウォギは依然として最終的な説明手段として用いられる。そういった場面では、同じミレルワ *mileruwa*（治療者）の語彙で呼ばれる者のなかでも、「ムズングの」それを差し置いて「ニャパドラ」という修飾語で語られる施術師の出番が求められる場面が、まだあるのである。

「マクドナルド化」式の近代化論に代表される、近代化によってすべてが塗りつぶされるという想定はあまりに単純だったことは改めて言うまでもない。また「伝統」と「近代」の二分法が、有効ではないことは、あちこちで確認されている。それらは、たとえば Bayart (1993, 2005) が論じるように、お互いに絡み合うように織り込まれている (*interwoven*) のであり、それぞれの要素を独立に取り出せるようなものばかりではないのである¹⁷⁾。そうした認識に立ったとき、可能な、かつ重要性があると思われる作業は、地域や集団によってさまざまに示される近代と前近代の諸要素の絡み合いが、いかなるものであるか、その様態をひとつひとつ確認することである。その過程では、ことによると、「近代」と「前近代」あるいは「非近代」とのあいだの垣根が、一般に思われているほど決定的だったかどうかも含めて疑ってかかる必要があるかもしれない。社会変化としての「近代化」を軽視するつもりはない。人類史においてそれが非常に大きな変化であったことは、改めて言うまでもない。しかし、人間はそのような変化のなかをも「ただ単に、生きてしまう」のである。その意味での環境適応能力は、どれほど高く見積もっても足りないもので

ある。

最後に、今後の議論のために一点だけ指摘しておくとしたら、ジュウォギの仕業にされる症状は、夜出歩く、踊り狂うなど、いずれも似通ったものであることだ。部外者からみると客観的現象、症状は共通であっても、その目撃経験についての解釈はいかようにでもつくようにも思われるのだ。医師にせよあるいは長老にせよ、ミレルワ *mileruwa* や特定の権威者による解釈と認定を経て、「災因」は確定される。しかもその確定された「災因」も、不測の要素があらわれると別の「災因」の可能性が疑われ、再解釈の可能性は常に開かれているといえる。そういった意味では現象と解釈の結びつきは、常に必然的なものではなく柔軟で、脆弱だとさえいえるかもしれない。これらの点については今後の調査でも、おそらくいつも想起させられることであろう。

注

- 1) 代表的クランを率いていた始祖の名前を冠して集団の名称にする、という手法は、アドラを含むルオでは古典的なやりかたであり、集団の創始者の子孫が集団を構成するようなグループでは、多くのリヴァー・レイク・ナイロト River-Lake Nilotes で古くから踏襲されてきたと推測されている (Cohen, 1968: 146)。
- 2) なかでも、子供専門の医療者をジョミウォル *jomiwor* (*pl., sing. jamiwor*) と呼ぶ。
- 3) このあたりの事情については、一回「病院」で治療を受けた症状が繰り返されることを「病院が打ち負かされる」といい、占いとしかるべき治療（病院ではない治療）が必要であると考えるケニアのドゥルマについての優れた分析がある（浜本, 1990: 48-55）。
- 4) LC は、もともと、ウガンダの政情が不安定だった時期に全土制圧を目指していたムセベニ (Yoweri Kaguta Museveni c.1944- 現大統領) 率いる NRA (National Resistance Army) の地元支援組織として組織した RC (Resistance Council) が1993年公付された地方自治令 (Local Government Statute, 1993) によって改名され、1997年の地方行政法 (Local Government Act, 1997) により法的根拠を与えられたものである。この1から5に至る LC にはすべて国会を模した議会があり、役職者が選挙で選ばれる (LC、3、5は直接選挙、2と4は間接選挙)。Local Government Act No.1 of 1997, Section 48 (1997年3月24日公布) によれば、副議長、書記、情報・教育・地域活性化、治安、財政、環境、女性委員会議長、青年委員会議長、障害者対策など国会や内閣を模した役職を設けることになっている。

- 5) Crop Husbandry Office, Tororo, 2010年調べ。
- 6) このムルスワという植物は、このあたりによく生えているのかたずねると、オシンデ・アキソフェル氏がしばらくブッシュをあるいて探してきてくれた。その後、2001年8月10日には、手近に手に入る薬草をあつめることができた。私はこれを、*Microglossa pyrifolia*（和名はシマイズハハコ）であろうと推測する（Kokware, 1998: 66-67）。
- 7) ワリゴナ *waligona*、カルンバ *kalumba*、ミセウエ *misewe*、ティダ *tida* など類似の症状を示す「病名」が複数あり、それぞれ微妙に異なっているが、最終的には治療に当たるミレルワの（古いや憑依託宣による）診断による。また、ある診断が下されても治療がうまくいかないと、当初の診断が覆されることもある。カルンバは女子供がかかることが多く、夜裸で踊り狂ったりするといわれ、昂じると森に入って行方不明になる。カルンバでは、真っ赤に焼けた炭を食べようとするなどの異常行動が報告されている。寄生虫が原因だと考えているものもいた。アクウオタ *akwota* という別名を持つ。観察できる症状としては、皮膚が黄色くなり、身体の一部が腐敗するとされている。いずれも、夜間に外に出たがり、裸で踊り狂うなど異常行動を示すとされる。施術師が依頼を受けて太鼓を打ち鳴らし、瓢箪のがらがらを鳴らしてその原因とみられる憑依霊を取り除く。なにが憑依しているかによって除霊の儀礼の際に歌われる歌や踊り、太鼓の調子が異なると言われる。施術師の能力は、こうした憑依霊に憑依されて一度儀礼を受け、憑依霊と何らかの取引をして折り合いをつけた結果であると解釈されることも多い。がらがらのなかには乾燥したトウモロコシの実が入っており「チエケレ *chekele*、チエケレ *chekele*」と音がする。擬音も資料の一部と考え、記録しておく。
- 8) 植物の一種だが、時期がくると種が破裂するという特徴をもつ。*Tylosema fassoglensis*（Kokwaro, 1972: 71, 142, plate 44b; Kokwaro & Johns, 1998: 96-97）と推定される。
- 9) 後述（81）参照。毒は、サミアやソガから最近になって伝わったものであるとされる。後に紹介するムブルク *mubuluk* という野鳥の肉（特に肝臓とも）からつくられるものがあるが、カタツムリの殻からつくるものもあるという。キテガ *kitega*、ムカマ *mukama*、マイエンベ *mayembe* などの異名を持つ邪術（および邪術師）も同じくバントウ諸民族由来とされる。最近マジニ *majini* というケニアのモンバサから入った邪術がごく一部で実践されていると伝えられている。
- 10) ジュウオギ *juwogi* はここでは、近似的に「霊」と訳しておく。梅屋（2007, 2008, 2009, 2015）など参照。
- 11) 蔓草植物。赤と黒の種が特徴的である。学名未詳。
- 12) 学名 *Lantana Camera*、和名はクマツヅラないしシチヘンゲ、ランタナ。
- 13) 種が灯油のように燃え、燃料にもなる。サンプルを現地で採集し、*Ricinus communis* と考えている。和名はトウダイグサ科トウゴマ属、トウゴマ、ヒマ（蓖麻）

の別名をもつ。

- 14) この葉の成分に関して口は堅かったが、おそらくは象の肉を利用したものであろうことが近隣の民族誌から推測される。
- 15) ナイル・パーチに似た魚の一種。成魚は非常に大きくなる。
- 16) 樹木だが、すりつぶして水と混ぜ、牛に与えることがある。
- 17) ちょうど、日本人の多くが数百年前まではなじみのなかった多くの西洋由来の文物に囲まれ、もはやそれが西洋由来であるかどうかなど立ち止まっては考えないように。

参考文献

日本語文献

- 梅屋 潔 (2007) 「酒に憑かれた男たち—ウガンダ・パドラにおける『問題飲酒』と妖術の民族誌」『人間情報学研究』第12巻：17-40.
- 梅屋 潔 (2008) 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—jwogi, tipo, ayira, lam の観念を中心として」『人間情報学研究』第13巻：131-59.
- 梅屋 潔 (2009) 「ウガンダ・パドラにおける『災因論』—現地語 (Dhopadhola) 資料対訳編」『人間情報学研究』第14巻：31-42.
- 梅屋 潔 (2015) 「葬送儀礼についての語り—ウガンダ東部・アドラ民族におけるオケウォの儀礼的特権」鈴木正崇編『森羅万象のささやき』風響社, pp. 375-396.
- 浜本 満 (1990) 「キマコとしての症状—ケニア・ドウルマにおける病気経験の階層性について」波平 恵美子編『病むことの文化—医療人類学のフロンティア』海鳴社, pp. 36-66.
- 渡辺 公三 (1983) 「病いはいかに語られるか—二つの事例による」『民族学研究』48 (3)：336-348.

外国語文献

- Bayart, Jean-François (1993) *The State in Africa: The Politics of the Belly*. London: Longman.
- Bayart, Jean-François (2005) *The Illusion of Cultural Identity*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Cohen, D. W. (1968) "The River- Lake Nilotes: 15th to 19th Century." *Zamani: A Survey of East African History*. B. A. Ogot & J. A. Kieran (eds.) East African Publishing House.
- Cook, Albert R. (1945) *Uganda Memories (1897-1940)*. Kampala: Uganda Society.
- Greenberg, J. H. (1963) *The Languages of Africa*. Publication of the Indiana University Research Center in Anthropology, Folklore, and Linguistics 25. Indiana University, Mouton.
- Illiffe, J. (2002) *East African Doctors: A History of the Modern Profession*. Kampala:

Fountain Publishers.

Kokwaro, J. O. (1972) *Luo-English Botanical Dictionary*. Kampala: East African Publishing House.

Kokwaro, J. O. & Timothy Johns (1998) *Luo Biological Dictionary*. Kampala: East African Educational Publishers Ltd.

Ogot, B. A. (1967) *History of Southern Luo, Vol. I, Migration and Settlement*. Nairobi: East African Publishing House.

（本稿のもとになる調査とその資料の整理は、科研費（24520912）、（15K03042）、（16H05664）の助成によるものである。）

The concept of *tuwo* among the Jopadhola of eastern Uganda: Eighty-eight categories of illness and their treatment

Kiyoshi UMEYA

In Association with Wandera MELCHISEDEK, Omadia JOSEPH & Ading FRANCIS

This paper summarizes eighty-eight categories of *tuwo* — a Dhopadhola word meaning ‘sickness’ or ‘disease’ — among the Jopadhola of eastern Uganda. Given the attitudes evident from these descriptions, it is difficult to find a clear distinction between traditional and modern medicine. Most accounts provide information concerning sanitation, and note that their measures and treatments are not of Western origin, or the result of a Western education. Accepting their narration that ‘traditionally cleanness was emphasised by elders’ as the truth, and then concluding naively that all these concepts have been preserved for a long time might be problematic. What is represented here is an image of their own embodied aetiology, and a system of treatment already indivisible to its binary elements; one is original, and the other has been imported from outside. Neither can ‘modern’ and ‘traditional’ be regarded as being in binary opposition or as alternatives, as long as in their everyday lives it might be impossible to extract purely ‘traditional’ elements, or, conversely, one hundred per cent ‘modern’ elements. Our changing societies are comprised of complicated elements and situations. We can gaze on the components of this ‘interwoven’ world, and examine their textures carefully.

Keywords: *tuwo*, sickness, disease, aetiology, Jopadhola, Uganda, modernity, tradition

キーワード：トウォ、病、疾患、災因論、アドラ民族、ウガンダ、モダニティ、伝統